
は し が き

本書は、国立歴史民俗博物館が1996年度から2001年度まで、館内外の歴史学、考古学、民俗学などの研究者を組織して実施した基幹研究「地域社会における基層信仰の歴史的研究」の一環として行った、奈良県における中・近世から現代に継続して利用されているいくつかの墓地の記録調査の報告書である。

墓地がそれぞれの時代に生きた人々の来世観や世界観、宗教の社会的役割、家族や村落のあり方、さらには経済や政治にまで及ぶ様々な問題を考える上にきわめて重要な研究資料であることはあらためて述べるまでもなからう。それは単に文献史料のない、あるいはあっても少ない原始・古代に限らず、中・近世や近・現代についても基本的には変わらない。このため歴史学、特にモノ資料を基本とする考古学や、習俗それ自体を研究資料とする民俗学では、葬制や墓制研究はそれ自体が研究の大きな柱として重要視されてきた。

ただ考古学では、どうしてもある時期に廃絶して遺跡化した墓地遺跡の調査が中心になり、民俗学では習俗や伝承の記録化に主眼がおかれるため、中世以来現在まで脈々と営まれてきた現存の墓地やその石塔については一部石造美術の研究者が注目することはあっても、組織的な調査研究が行われることはきわめて稀であった。坪井良平氏の山城木津惣墓についての調査などの一部の先駆的な研究や、戦後の元興寺文化財研究所による調査・研究などを除いて、その研究が遅れていることは否定しがたい。特に1960～70年代には生活様式の大きな変化にともない、墓地自体やそこでの習俗は大きく変貌してしまった。この時期に重要な歴史研究資料である、中世以来その利用が継続する墓地の記録化のための適切な対応を怠ったことは、考古学、民俗学、さらに歴史学がともに負わなければならない大きな負目と言わなければならない。

奈良盆地の東方に展開する大和高原（東山中）^{ひがしさんちゅう}からその南部の宇陀地域は、ごく最近まで両墓制的慣行が残り、それぞれ特異な墓地景観が保たれてきたところである。また中世墓地の発掘調査例も多く、中・近世から近・現代への葬制・墓制の変遷過程を考える上で絶好のフィールドである。一方国中^{くんなか}と呼ばれる奈良盆地では、現在もいくつかの村が墓郷を構成し、共同で大規模な共同墓地としての郷墓（惣墓）を営むところが多い。ただこれら山^{さん}中^{ちゅう}と呼ばれる山間部の村落墓地や国中の郷墓自身も近年大きく変貌をとげつつあり、古い墓地景観や葬送習俗も急速に失われつつある。

このため、私たちは宇陀郡菟田野町^{うとうだに}の入谷墓地と山辺郡都祁村吐山^{はやま}のいくつかの村落墓地、さらに奈良盆地の郷墓のうち比較的古い墓地景観や葬送習俗の残る二つの郷墓、すなわち北葛城郡新庄町平岡極楽寺墓地と天理市中山念仏寺墓地について、それぞれの現状の正確な記録を作成するとともに、あわせてそれらの墓地における墓地利用のあり方やその成立・変遷の過程を追求しようとした。墓地全域の測量図を作成し、すべての石塔に番号を付け、それぞれの形式、法量、石材、銘文などを記録化する計画を立て、実施した。このうち菟田野町の入谷墓地と都祁村吐山のいくつかの村落墓地の調査は本館の特定研究経費によって実施し、新庄町平岡極楽寺墓地と天理市中山念仏寺墓地については1997～2000年度の文部科学省科学研究費補助金や2000～01年度の三菱財団研究助成金によって実施したものである。

本調査・研究の最大の眼目は、中世以来存続する東山中の村落墓地や国中の二つの郷墓の20世紀末の時点における正確な記録を作成して、今後の研究者の利用に供するところにある。この報告が墓地や葬墓制、またその社会史的研究の資料として広く活用されることを願ってやまない。またこの調査の中で、それぞれの墓地の形成や変遷過程、さらにその歴史的な意味やその他関連する問題について私たちが考えたところについても、本書や別冊の本基幹研究の報告書（『国立歴史民俗博物館研究報告』112）において不十分ながら論述している。それらについても忌憚ないご批判がいただければ幸いである。

これらの調査をほぼ計画どおり実施し、貴重な記録を作成することができたのは、菟田野町入谷墓地については入谷地区の森本忠夫、藤村弥史郎氏はじめ同地区の方々および菟田野町教育委員会、都祁村吐山地区の墓地については吐山地区の方々および都祁村教育委員会、新庄町平岡極楽寺墓地については極楽寺住職横井照典師および新庄町教育委員会、天理市中山念仏寺墓地については念仏寺住職赤土隆造師、中山地区区長竹本克彦氏および天理市教育委員会のご理解とご高配の賜物にほかならない。厚くお礼申し上げる次第である。また調査にも参加され、諸種の教示をいただいた奈良県立橿原考古学研究所の今尾文昭、奥田尚、天理大学おやさと研究所の幡鎌一弘の諸氏にも感謝したい。

この調査には、研究チームの考古学のメンバーを中心に多くの方々の参加・協力を得たが、現地調査は代表者の白石のほか、設楽博己、千田嘉博、村木二郎、吉澤悟、朽木量、曾根茂、村木（荒木）志伸、関口慶久、千葉佳奈子の諸氏が中心となって進めた。特に千田、村木、吉澤、朽木の4氏は調査推進の原動力として現地調査の遂行や膨大なデータの整理、本報告書の作成に献身的に努力された。諸氏がこの調査で得たものも少なくなかったと思われるが、特にその努力を多としたい。またこうした地味で根気のいる石塔の悉皆調査に協力してくれた関西や東京の各大学、大学院の学生諸氏をはじめとする多くの方々にも心から感謝申し上げたい。

2003年5月

国立歴史民俗博物館基幹研究「地域社会における基層信仰の歴史的研究」

研究代表者 白石 太一郎
